

子どもと花

教会のカレンダーには「こどもの日・花の日」というのがあります。6月の第2日曜日がそれです。ジュンブライドという言葉と同じように、花が一斉に咲く6月（日本の6月は梅雨で、5月のほうが百花繚乱の時期ですが）に由来しているのでしょうか。

筆者が行っている西千葉教会では、普段別々に礼拝している子どもと大人が、この日は一緒に礼拝します。その礼拝で、「花を見ていると」という歌が毎年歌われます。この歌は「こどもの日・花の日」のために、15年程前に筆者が詞と曲を作ったものです。その詞は次のようです。（一部略）

花は育つ、休まずあわてずに 根を張り葉を広げ、咲く朝を待つ
花は開く、静かに知らぬ間に 朝日と葉の露の光を受けて
花は生きる、迷わずゆるがずに その色その香り、そのままに咲く

この曲を作ったとき、私の家の庭には一本の百合が育っていました。前の年にいただいて庭に植えたものでした。1年経って、その場所にまたもっこりと百合が顔を出しました。ちょっとビックリしました。そこに百合を植えたことを忘れていたのです。そして、こちらが忘れてしまっていた間に、地中で根を張り、時を得て顔を出したその姿に何か感動のようなものを覚えました。そのときの感動をモチーフにして、この詞が生まれました。

子どもの育つ姿もこの百合ととてもよく似ていると思います。曲を作った頃のことを思い起こしながら、似ていると思わされることを列挙してみましょう。

まず第1は、子どもも花もわたしたちの見えないところで根が張って行っているということです。それは何かが出来るといような目に見えるものではありません。子どもの心の中の見えないところで、感じる心、考える力という根がどんどん育っているのです。

第2は、育ちの姿は時が来ると見えて来るとということです。あの百合のようにです。それはこちらの計画や目算とは必ずしも一致してはおりません。子ども自身それぞれに熟すときがあり、それは皆違って、私たちはそれがいつかを知ることが出来ないのです。

第3は、花はきっと開くということです。しかもそれは朝起きて庭に出てみて、咲いている花を見つけるように、ある日突然その姿に気が付くのです。そのとき私たちは知ります、子どもの育ちは大人の手柄ではなく、彼自身に開くべきものがあつたからだということを。

第4は、子どもの育つ姿の美しさの背後には、それを輝かせる光があるということです。それは朝日の光であり、葉に宿る露もまた光を放ちます。その光は皆をハッピーにします。

第5はその子はその子としてしか生きられないということであり、第6はその子の持っている良さは他のものでは代えられないということです。10年ほど経ってスマップが「世界にたったひとつの花」で歌ったとおりです。

花を育てるのが好きな方はたくさんおられます。きっと花からたくさんのことを学んでおられるでしょう。つぼみをポンドで無理やりつけることも、つぼみをこじ開けることもできない。「きれいに咲いてネ」と念じながらお世話するしかない。それが花を育てる極意でしょう。そして花が咲いたら、咲いてくれた花と、咲かせてくださった見えない力に感謝するのです。